

『正法眼蔵』「仏性」巻訳註（九）

角 田 泰 隆

凡例

一、本稿は、二〇二三年度における、駒澤大学大学院の角田ゼミ（宗学特講Ⅱ【演習】）で作成した資料を基に作成したものである。

二、【本文】は、本山版『正法眼蔵』（寛政十一年（一七九九）刊）を底本とし、左記の『正法眼蔵』諸本と校異して作成した。校異は本文下段に示したが、字体の違い（新字・旧字・異体字等）は、校異から除いた。諸写本によつて底本の本文を改めた部分もあるが、その場合は校異に記した。校異した諸本の略号は次の通りである。なお、これらの写本は全て『蒐書大成』に収録されている。

懐奘書写本…懐 正法眼蔵抄…抄 乾坤院所蔵本…乾 正法寺所蔵本…正 龍門寺所蔵本…龍

洞雲寺所蔵本…洞 瑠璃光寺所蔵本…瑠 長円寺所蔵本…長 玉雲寺所蔵本…玉 徳雲寺所蔵本…徳

三、【本文】は便宜的に適宜分割し、最初に段落分けを示すため【本文】のみをまとめて掲げ、番号を付した。底本の片仮名は平仮名に改め（子↓ね、牛↓ゐ、エ↓ゑ）、内容解釈に基づいて独自の句読点とルビを付した。【本文】・【懐奘書写本】の漢字は原典の字体をそのまま用いたが、【本文】以外は、【本文】からの引用も含めて、原則として新字体に改めた。

四、【語註】は既刊の辞典等を参照して新たに作成したが、辞典等をそのまま引用したものについては典拠を明記した。【語註】・【解説】で『正法眼蔵』を引用する場合は、大久保道舟編『古本校訂正法眼蔵全』（筑摩書房、一九七一年四月）より引用し、頁数のみ記した。但し、既刊の『正法眼蔵』「仏性」巻訳註「収録箇所は、当該号の略号と頁数で示し

『正法眼蔵』「仏性」巻訳註(九)(角田)

五四

た。引用文中の傍点・傍線は、全て筆者が付したものである。参照文献・辞典の略号は次の通りである。

『大正新脩大蔵経』：『大正蔵』 『大日本統蔵経』：『正統蔵』

『景德伝燈録』(禪文化研究所、一九九〇年五月)：『禪文化本』

中村元編『仏教語大辞典』(東京書籍、一九八一年五月)：『中村仏教』

『新版禅学大辞典』第十刷(大修館書店、二〇二〇年四月)：『禅学』

入矢義高・古賀英彦編『禅語辞典』(思文閣出版、一九九一年七月)：『禅語』

『大漢和辞典』：『大漢和』 『漢辞海』第四版(三省堂、二〇一九年二月)：『漢辞海』

大久保道舟編『道元禅師全集』下巻(筑摩書房、一九七〇年五月)：『大久保本』

水野弥穂子校註 岩波文庫本『正法眼蔵』(岩波書店、一九九〇～一九九三年)：『岩波文庫本』

『道元禅師全集』(春秋社〈原典版〉、一九八八～一九九一年)：『春秋社本』

『道元禅師全集』(春秋社〈原文対照現代語訳版〉、一九九九～二〇〇三年)：『春秋社本(現代語訳版)』

河村孝道・角田泰隆編『普及版』(本山版訂補正法眼蔵)(大本山永平寺、二〇二三年九月)：『本山版訂補』

『永平正法眼蔵蒐書大成』(大修館書店、一九七四～一九八二年、続輯一九八九～二〇〇〇年)：『蒐書大成』

角田泰隆『正法眼蔵』「仏性」巻訳註(一)『駒澤大学仏教学部研究紀要』七十四号、二〇一六年三月：『仏性訳註(一)』

角田泰隆『正法眼蔵』「仏性」巻訳註(二)『駒澤大学仏教学部研究紀要』七十五号、二〇一七年三月：『仏性訳註(二)』

角田泰隆『正法眼蔵』「仏性」巻訳註(三)『駒澤大学仏教学部研究紀要』七十六号、二〇一八年三月：『仏性訳註(三)』

角田泰隆『正法眼蔵』「仏性」巻訳註(四)『駒澤大学仏教学部研究紀要』七十七号、二〇一九年三月：『仏性訳註(四)』

角田泰隆『正法眼蔵』「仏性」巻訳註(五)『駒澤大学仏教学部研究紀要』七十八号、二〇二〇年三月：『仏性訳註(五)』

角田泰隆『正法眼蔵』「仏性」巻訳註(六)『駒澤大学仏教学部研究紀要』七十九号、二〇二一年三月：『仏性訳註(六)』

角田泰隆『正法眼蔵』「仏性」巻訳註(七)『駒澤大学仏教学部研究紀要』八十号、二〇二二年三月：『仏性訳註(七)』

角田泰隆『正法眼蔵』「仏性」巻訳註(八)『駒澤大学仏教学部研究紀要』八十一号、二〇二三年三月：『仏性訳註(八)』

なお「仏性訳註(一)」から「仏性訳註(八)」は「駒澤大学学術機関リポジトリ」にてインターネット公開されている。
五、【直訳】は、できる限り本文に忠実に訳し、基本的に古文を現代語に訳すにとどめ、一部便宜的に漢字用語の現代

語訳も行った。また、へゝ内に本文にない言葉を補った。

六、【現代語訳】は、【直訳】に基づいて漢字用語の解説を加え、理解しやすくするためにへゝ内に本文にない言葉を補い、必要に応じて（ ）内に直前の語の解釈を付した。

七、【懷契書写本に見られる書き改めについて】は、懷契書写本の書き改めの前後でどのように内容が変化したかについて特に解説した。書き改めが少ない場合は、【解説】の中で簡単に言及する形とし、一切無い場合は略した。【懷契書写本】掲載の理由については、「仏性訳註（二）」七七頁を参照されたい。

【本文】(当号検討分)

① 百丈山大智禪師、示レシテ衆ニ云ク、佛ハ是レ最上乘ナリ、是レ上上智ナリ、是レ佛道立此人ナリ、是レ佛有佛性ナリ、是レ導師ナリ。是レ使得無所礙風ナリ、是レ無礙慧ナリ。於テ後ニ能ク使レ得ス因果ヲ、福智自由ナリ。是レ作レシテ車ト運ニ載ス因果ニ。處ニ於生ニ不被二生ノ之所留ヲ、處ニ於死ニ不被二死ノ之所礙ヲ、處ニ於五陰ニ如ニ門ノ開クガ、不被二五陰ノ礙ヲ、去住自由ニシテ、出入無難ナリ。若能ク恁麼ナラバ、不レ論ニ階梯勝劣ヲ、乃至蟻子ノ之身モ、但能ク恁麼ナラバ、盡ク是レ淨妙國土、不可思議ナリ。

これすなはち百丈の道處なり。いはゆる五蘊は、いまの不壞身なり。いまの造次は、門開なり、不被五陰礙なり。生を使得するに、生にとどめられず、死を使得するに、死にさへられず。いたづらに生を愛することなかれ、みだりに死を恐怖することなかれ。すでに佛性の所在なり。動著し厭却するは外道なり。現前の衆縁と認ずるは、使得無礙風なり。これ最上乘なる是佛なり。この是佛の所在すなはち淨妙國土なり。

② 黄檗、在リテ南泉ノ茶堂ノ内ニ坐ス。南泉、問ニ黄檗ニ、定慧等學、明見佛性、此ノ理如何。黄檗曰ク、十二時中不レ依二倚セ一物ニ始メテ得シ。南泉云、莫ニ便チ是レ長老ノ見處ナルコト麼。黄檗曰ク、不取。南泉云ク、醬水錢ハ且ラク致ク、艸鞋錢ハ教ン什麼人ヲシテカ還エザ。黄檗便チ休ス。

いはゆる定慧等學の宗旨は、定學の慧學をさへざれば、等學するところに、明見佛性のあるにはあらず、明見佛性のところに、定慧等學の學あるなり、此ノ理如何、と道取するなり。たとへば、明見佛性はたれが所作なるぞ、と道取せんもおなじかるべし。佛性等學、明見佛性、此理如何、と道取せんも道得なり。

黄檗いはく、十二時中不依倚一物といふ宗旨は、十二時中たとひ十二時中に所在せりとも、不依倚なり。不依

倚一物これ十二時中なるがゆゑに、佛性明見なり。この十二時中、いづれの時節到來なりとかせん、いづれの國土なりとかせん。いまいふ十二時は、人間の十二時なるべきか、佗那裏に十二時のあるか、白銀世界の十二時のしばらくきたれるか。たとひ此土なりとも、たとひ佗界なりとも不依倚なり。すでに十二時中なり、不依倚なるべし。莫便是長老見處麼といふは、これを見處とはいふまじや、といふがごとし。長老見處麼と道取すとも、自己なるべしと回頭すべからず。自己に的當なりとも黄檗にあらず。黄檗かならずしも自己のみにあらず。長老見處は露迴迴なるがゆゑに。

※本段の資料作成担当者は左記の通りである（所屬・課程年次は本稿提出当時のもの）。

①黒田敬仁（修士課程二年）、②高田法順（修士課程一年）。

なお本稿は、右記の資料作成者に加えて、左記のゼミの参加者によつて検討した共同研究である。

秋津秀彰、横山龍顯、藤川直子、菅野優子、中野智教（博士後期課程二年）、松田薫（博士後期課程一年）、多田拓郎・西有輪音（修士課程一年）、阿部伸二、玉井宏道、吉田裕、福土修成、宮崎隆（順不同・敬称略）

百丈山大智禪師、示シテ衆ニ云ク、佛^ハ是^レ最上乘^{ナリ}、是^レ上上智^{ナリ}、是^レ佛
 道立此人^{ナリ}、是^レ佛有佛性^{ナリ}、是^レ導師^{ナリ}。是^レ使得無所礙^{風ナリ}、是^レ無
 礙^{ナリ}。於^レ後^ニ能^ク使^ニ得^ス因果^一、福智自由^{ナリ}。是^レ作^{シテ}車^ト運^ニ載^ス因果^一
 * 處^ニシテ^ニ於^ニ生^ニ不^レ被^ラ二生^ノ之所留^一、處^ニシテ^ニ於^ニ死^ニ不^レ被^ラ二死^ノ之所礙^一、處^ニシテ^ニ於^ニ
 五陰^一如^ニク門^ノ開^カ、不^レ被^ラ二五陰^ノ礙^一、去住自由^ニシテ、出入無難^{ナリ}。若^シ能^ク
 恁麼^{ナラバ}、不^レ論^ニ階梯勝劣^一、乃至蟻子^ノ之身^モ、但能^ク恁麼^{ナラバ}、盡^ク是^レ
 淨妙國土、不可思議^{ナリ}。

* これすなはち百丈の道處なり。いはゆる五蘊は、いまの不壞身なり。
 * いまの造次は、門開なり、不被五陰礙なり。生を使得するに、生にとど
 められず、死を使得するに、死にさへられず。いたづらに生を愛するこ
 となかれ、みだりに死を恐怖することなかれ。すでに佛性の所在なり。
 動著し厭却するは外道なり。現前の衆縁と認するは、使得無礙風なり。
 * これ最上乘なるは佛なり。この是佛の所在すなはち淨妙國土なり。

禪^一禪^{（懷）}（乾）（正）（龍）（洞）（璠）（長）（玉）（徳）
 云^一曰^{（龍）}
 智^一知^{（龍）}
 此^一右^{（抄）}、「シ」アリ
 使得^一右^{（抄）}、「シテ」アリ（抄）、右、「システ」アリ（璠）、
 右、「ステ」アリ（長）（玉）（徳）
 礙^一右^{（抄）}、「ケ」アリ（抄）
 慧^一惠^{（乾）}（正）（龍）
 後^一右^{（抄）}、「アチニ」アリ（抄）（乾）（正）（龍）、右、「コ
 コニ」アリ（璠）（長）（玉）（徳）
 使得^一右^{（抄）}、「ステ」アリ（璠）
 福^一福^{（懷）}（乾）（正）（洞）（璠）（徳）
 運載^一右^{（抄）}、「ウムサイ」アリ（抄）
 處^一処^{（乾）}、以下略、右、「シヨ」アリ（抄）
 留^一右^{（抄）}、「ト、メ」アリ（抄）

國一國（龍）

これナシ（乾）、これすなはち―是便、右、「コレス
 ナハチ」アリ（璠）
 道^一右^{（抄）}、「タウ」アリ、左、「イフトコロ」アリ（璠）
 は^一わ^{（璠）}
 蘊^一陰^{（懷）}（洞）（璠）、蓋^{（乾）}（正）（龍）、蘊^{（長）}
 （玉）（本）、右、「ウン」アリ（玉）
 造次^一左^{（抄）}、「ツクリサマ」アリ（璠）
 陰^一蘊^{（乾）}
 使得^一右^{（抄）}、「ステ」アリ（長）（玉）（徳）
 使^一死^{（乾）}
 こと^一事^{（乾）}（正）（龍）、支^{（長）}（玉）（徳）、以下略
 恐怖^一右^{（抄）}、「クフ」アリ（長）（玉）（徳）
 所^一處^{（懷）}（乾）（正）（龍）（洞）（璠）
 厭^一右^{（抄）}、「エン」アリ（長）、右、「エン」アリ、左、「イ
 ト」アリ（玉）（徳）
 厭却^一右^{（抄）}、「エンキヤク」アリ（璠）
 る^一り（正）

※懷奘書写本の書き改めナシ。

是佛一右、「セフツ」アリ（璠）
此一是、右「ゴノ」アリ（璠）
所一處（懷）乾（正）龍（洞）（璠）、所在一處在
右、「シヨサイ」アリ（璠）

【書き下し】

百丈山大智禪師、衆に示して云く、「仏は是れ最上乘なり、是れ上上智なり、是れ仏道立此人なり、是れ仏有
仏性なり、是れ導師なり、是れ使得無所礙風なり、是れ無礙慧なり。後に於て能く因果を使得す、福智自由なり。是
れ車と作して因果を運載す。生に処して生の所留を被らず、死に処して死の所礙を被らず、五陰に処して門の開
くが如く、五陰の礙を被らず、去住自由にして、出入無難なり。若し能く恁麼ならば、階梯勝劣を論ぜず、乃至蟻
子の身も、但能く恁麼ならば、尽く是れ淨妙国土、不可思議なり」。

【語註】

百丈山大智禪師：百丈懷海（七四九—八一四）のこと。「福州長樂県（福建省閩侯県）の人。俗姓は王氏。西山（広東省潮安県）慧照和尚の下で出家し、衡山（湖南省）法朝律師の下で受戒した。次いで廬江（安徽省）の浮槎寺で大蔵經を閲していたとき、馬祖道一が南康（江西省贛県）で化を振るつていと聞き、行きて師事し、その法を嗣ぐ。その寂後、その墓守りをしていたが、檀越の請により、江西省南昌府奉新県の大雄山（百丈山）に住して法を宣揚した」（『岩波仏教辞典』、岩波書店、二〇〇二年一〇月、六七九頁、振り仮名筆者）。百丈山は「南昌（江西省）奉新県西一二〇里にある。旧名、大雄山」（『禅学』一〇五〇頁）。**仏は最上乘く不可思議**：出典は『天聖広燈録』巻九の百丈懷海章。この巻の引用文の前には以下の文が存する。「故見自己仏性、如夜見色。如云仏地断二愚。一微細所知愚、二極微細所知愚。故云、有大智人破塵出経卷。若透三句、得遇。不被三段管教法。举例、如鹿得三跳出網。喚作纏外。仏無物拘繫、得渠。是属然灯後（故に自己の仏性を見るは、夜に色を見るが如し。云うが如く、仏地、二愚を断ず。一は微細にして愚を知る所なり。二は極微細にして愚を知る所なり。故に云く、大智の人の破塵して経卷を出づる有り。若し三句に透せば遇わんこ

とを得。三段の管教法を被らず。喩を挙ぐるに、鹿、三跳を得て網を出づるが如し。喚びて纏外と作す。仏、物の拘繋する無く、渠を得。是れ然灯の後に属す(『禅学叢書』五、中文出版社、一九七五年六月、四一九頁)。最上乘：教法を乗り物にたとえ、最もすぐれた仏乗のことをさす。後文に「是れ車と作して因果を運載す」とあり、『法華経』「譬喩品」にある「大白牛車」のことを指していると考えられる。『御抄』に「五乗(天・人・声聞・縁覚・菩薩が五乗である)に比べて仏は勝っているので「最上乘」とこのように言う」とある(『菟書大成』十一・一八七頁)。上上智：もつともすぐれた智慧。最上智(『禅学』五五九頁)。『入楞伽經』卷五に「大慧、有三种智。何等為三。一者、世間智。二者、出世間智。三者、出世間上上智(大慧よ、三種の智有り。何等をか三と為す。一は、世間智。二は、出世間智。三は、出世間上上智)」(『大正藏』十六・五四四頁)とある。仏道立此人：「仏道、此れを立つる人」と書き下し、仏道を立てた人。「仏道はこの仏が立てたものである」の意。「仏は仏道を体現している人である」「仏道が此の人を立てている」という意にも解釈できる。引用元の『天聖広燈録』卷九では「仏道上立此人」と「上」の字が存する。なお『聞解』では「百丈山此文見易、是仏道上立此人、上立は、上として立つる、建立の義に見る」と注釈している。使得無所礙風：妨げられることがなく、自由自在に使いこなすこと。「使得」は使いこなすことで、『禅語』には「得は動詞の後について、可能・完成をあらわす」(三五〇頁)とある。「風」は自由自在なものの喩えと考え、自由なものを使いこなすことという解釈もできる。無礙慧：何ものをも妨げない智慧。於後：ここにおいて。写本によつては「のちにおいて」と訓読する(校異参照)が、『聞書抄』に「此ノ後ト云ハ、非前後之後、無礙慧ノ上ヲ後トサスナリ。後ヲハ、コ、ニト可読歟(此の後と云は、前後の後にあらず、無礙慧の上を後とさすなり。後をば、ここに読むべきか)」(『菟書大成』十一・一九〇頁)とあり、これを【書き下し】の読みに反映させた。福智：福慧。福德と智慧(『禅学』一〇六四頁)。自由：完全な主体性を確立すること、臨済の言葉でいえば、随处に主となること。そのことよつて自在無碍であること(『禅語』一八〇頁)。五陰：色・受・想・行・識のこと。後註「不壞身」項参照。去住自由：進退動作が一多・有無二辺に迷惑されることなく、自ら主体的に営為することをいう。『禅学』二二二頁『臨済録』に「不染生死、去住自由」(『大正藏』四七・四九七頁)とあるが、道元禪師はこれを念頭に百丈の道処の「去住自由」を引用の上、本文後段の「生死」に係る示衆をされたと考えられる。「去住」は、行くことと留まることで、「脱著」(着物を着る、脱ぐ)と並挙される「生死」の譬喩である。「自由」は「自らに由る」、「自分で決めること」(齋藤智寛・衣川賢次『六祖壇経・臨済録』『新国訳大蔵経』中国撰述

部一―七）、大蔵出版、二〇一九年十月、二六二―二六三頁）。**不論階梯勝劣（階梯勝劣を論ぜず）**：修行の段階や勝劣を問わない。**淨妙国土**：淨土、仏土。般若訳『大方広仏華嚴經』（四十巻）巻三十八に「善財童子白言、聖者。行何等法、当得聖者淨妙国土。文殊師利言、若諸菩薩能於一切無憍慢心、於諸衆生平等心、於諸如来修真供養、得我国土（善財童子白して言わく、「聖者よ。何等の法を行ぜば、当に聖者の淨妙国土を得るや」。文殊師利言わく、「若し諸菩薩能く一切に憍慢心無く、諸衆生に平等心を生じ、諸如来に真なる供養を修せば、我が国土を得べし）」（『大正蔵』十・八三七頁）とある。**不壞身**：常住の身体、法身のこと（『禪学』一〇六〇頁）。「不壞身」の語はしばしば經典では如来の身体の説明の際に用いられる。「不壞身」の用例としては法顯訳『大般涅槃經』巻一（『大正蔵』一・一九三頁）に「金剛不壞身」の語が、仏陀跋陀羅訳『大方広仏華嚴經』（六十巻）巻二十八（『大正蔵』九・五八三頁）に「不壞身」の説明がある。また『聯燈会要』巻六「趙州從諗」章（『五山版中国禅籍叢刊』二（上）、臨川書店、二〇一四年十月、二六四頁）には「如何是不壞性、師云、四大五蘊」の語が見られ、趙州從諗（七七八〜八九七）は、四大五蘊を不壞性とする。また道元禪師の著作における出典については、「仏性訳註（六）」「四大五蘊」項（九頁）参照。**造次**：日常生活における僅かな間の振る舞いのこと。瑠璃光寺本では「ありさま」と読む。語義については「仏性訳註（六）」「九頁参照」。**いたづらに生をく死を恐怖することなかれ**：「愛する」は執着する、「恐怖する」は恐れる。ここに述べられる道元禪師の生死観は、「身心学道」の巻でも以下のように説かれる。「いはゆる生死は凡夫の流転なりといへども、大聖の所脱なり。超凡越聖せん、これを真実体とするのみにあらず。これに二種七種のしなあれど、究尽するに、面面みな生死なるゆゑに恐怖すべきにあらず。ゆゑいかなとなれば、いまだ生をすてざれども、いまずでに死をみる。いまだ死をすてざれども、いまずでに生をみる。生は死を罣礙するにあらず、死は生を罣礙するにあらず。生死ともに凡夫のしるところにあらず」（四〇〇〜四一頁）。**動著**：動揺すること。また心がゆらぎ妄想を起すこと（『禪学』九二五頁）。**厭却**：嫌うこと。「却」は動詞のあとに添え意味を強める助字。**外道**：仏教以外の教えを信奉する人々。「仏性訳註（二）」「先尼外道」項（九七頁）参照。

【直訳】

百丈山大智禪師が、大衆に示して言った、「仏は最上乘であり、上上智であり、仏道立此人であり、仏有仏性であり、導師であり、使得無所礙風であり、無礙慧である。後においてよく因果を使得し、福智自由である。是れ車となして因

果を運載する。生に処して生に留められず、死に処して死に妨げられず、五蘊に処して、門が開くように、五蘊に妨げられず、去住は自由であり、出入は難くない。もしよくこのようであるならば、修行の段階や勝劣を論ずることはなく、蟻の身に至るまでも、ただよくこのようであるならば、すべて淨妙国土であり、不可思議である」。

これがすなわち百丈の言うところである。ここで言う五蘊は、今の不壞身である。今の造次は、門が開いているのであり、不被五陰礙である。生を使いこなすのに、生に留められず、死を使いこなすのに、死に妨げられない。むやみに生を愛してはならない、やみくもに死を恐れてはならない。(生死は)すでに仏性の所在である。(生を愛して)動揺し(死を恐れて)嫌うのは外道である。(生死は)目の前のあらゆる因縁と認めるのは、使得無礙風である。これが最上乘である是仏である。この是仏の所在がそのまま淨妙国土である。

【現代語訳】

百丈山大智禪師が、修行僧達に示して言った、「仏は最も優れた乗り物であり、最も優れた智慧であり、仏道を立てた人であり、有仏性の仏であり、(衆生を)導く師であり、妨げられない自由を自在に使いこなすのであり、妨げられない智慧である。ここにおいて因果を使いこなす、福德と智慧も自由である。(仏は)車となつて因果を載せて運んでいく。生にあつて生に留まることなく、死にあつて死に妨げられず、五蘊の身のままで、門が開いているように、五蘊に妨げられず、行くも留まるも自由であり、出るも入るも難くない。もしこのようであるならば、修行の段階や勝劣を問う必要はなく、(小さな)蟻の身にも至り、ただこのようであるならば、全てが淨妙の仏国土であり、不可思議である」。

これがすなわち百丈の言うところである。ここで言う五蘊とは、今の(仏性としての)不壞の身体のことである。今の振る舞いは門が開いているのであり、五蘊に妨げられないのである。生を使いこなして生に留まることなく、死を使いこなして死に妨げられない。むやみに生を愛してはならないし、やみくもに死を恐れてはならない。(この生死は)すでに仏性の在処(ありか)である。(生を愛して)動揺し(死を恐れて)嫌うのは外道である(仏教ではない)。(生は)死は仏性の在処であり、目の前のあらゆる因縁(現象)(を仏性)と認めるのは、何物にも邪魔されない(仏性を)自由に使ひこなすのである。これが最も優れた乗り物である是仏(仏そのもの)であり、この是仏のいる場所こそが、淨妙の仏国土である。

【解説】

道元禪師が「仏性」の巻で、この百丈懷海の語を引用したのは、おそらくこの中に「有仏性」という語が見られるからであろう。この引用文は百丈が「仏とは何か」について言葉を変えて示しているものであり、その中の一つが「是仏有仏性」であるが、この引用文を挙げての拈提（解説）の中で、何故か「有仏性」の語に触れていない。先に、塩官齊安の「一切衆生有仏性」についての拈提で、既に「有仏性」については触れているからでもあるが、ここでは、この引用文にある「五蘊」の語を取り上げ、さらに五蘊に関わって生死の問題に言及している。そして「生死」が「仏性の所在」であることを示している。ところで、「生死」が「仏性の所在」であるとする説示からは、次の「生死」の巻の一説が思い起こされる。

生死をはなれんとおもはん人、まさにこのむねをあきらむべし。もし人、生死のほかにほとけをもとむれば、ながえきたにして越にむかひ、おもてをみなみにして北斗をみるとするがごとし。いよいよ生死の因をあつめて、さらに解脱のみちをうしなへり。ただ生死すなはち涅槃とところえて、生死としていとふべきもなく、涅槃としてねがふべきもなし。このときはじめて生死をはなるる分あり（七七八頁）。

この生死は、即ち仏の御いのち也。これをいとひすてんとすれば、すなはち仏の御いのちをうしなはんとする也。これにとどまりて生死に著すれば、これも仏のいのちをうしなふ也、仏のありさまをとどむるなり。いとふことなく、したふことなき、このときはじめて仏のころにいる（七七八く七七九頁）。

これらの一節の趣旨は、生死輪廻する世界のほかに涅槃を求めてはならず、生死輪廻する世界の中に、「ほとけ」があることを言うものと思われるが、生死の中に仏があるとすると「生死」の巻での説相と、生死が仏性の所在であるとする「仏性」の巻のこの段の説相とは関連性がある。「仏性」の巻で、生死が仏性の所在であるとするのは、生死輪廻する凡夫世界こそ仏性の世界であることを示したものと云えないだろうか。

ところで、生死は五蘊（我々の身心）に関わるものであり、五蘊に関わって生死の問題が示されたと考えられるが、常識的には五蘊はいわゆる壞身（死を免れない身体）であり、「不壞身」とはいえない。「不壞身」については、【語註】でも述べたが、常住の身体、法身のことをいう。道元禪師が「いはゆる五蘊は、いまの不壞身なり」と示すのは、趙州從諗と同じく、「四大五蘊」を仏性とし、不壞の性そのものとするからである。ここでは、五蘊が生死（輪廻）する世

界のあり方の中に仏性がある、いや、この世界が仏性の世界であるというのである。なお、趙州の公案に関しては、「仏性訳註(六)」九頁、「四大五蘊」項を参照されたい。

また、この生死を「有仏性」と関わらせて考えれば、「有仏性」や「無仏性」の有や無を「有る」「無し」の有無と解釈するのではないことを前提として、「有を生、無を死」と解釈して生死を考えるのではなく、生死こそ仏性であることを示そうとしたことが本段のテーマとも思われる。

道元禪師は百丈の「仏是最上乘」という語を取り上げて「これ最上乘なる是仏なり」と示している。主語はおそらく「仏」と思われるが、ここで「是仏」という語に注目すべきである。普通の言い方では「これ最上乘なる仏なり」であろうが「仏」を「是仏」としている。百丈の言う「是」は、仏を提示する「これ」と解釈するのが妥当であろうが、道元禪師はこの「是」をそのように解釈してはいないと思われる。それがこの「是仏」という熟語である。

「是仏」と言えば「即心是仏」の語が思い浮かぶ。「即心是仏」の巻で道元禪師は、「即」「心」「是」「仏」それぞれの語について解説し、「仏百草を拈却しきたり、打失しきたる。しかあれども、丈六の金身に説似せず。即公案あり、見成を相待せず、敗壞を廻避せず。是三界あり、退出にあらず、唯心にあらず。心牆壁あり、いまだ泥水せず、いまだ造作せず(四四頁)と説示している。「即心是仏」とは一般的には「心こそ仏である」ということを示す熟語である。しかし道元禪師は「心」をいわゆる「こころ」とは受け取らず、総てのものごとを「心」とする(これについてはここでは詳説しない)。そして「是」についても「これ」とは解釈せず「三界」つまり全世界(「三界は全世界なり」)、「三界唯心」の巻、三五三頁)による)と解釈するのであるから、この「仏性」の巻での「是仏」も、「是(こ)の仏」ではなく「是(せ)なる仏」と仏を形容している「是」(真理・事実)という理解もできる。

このような視点からすれば、道元禪師は百丈の「仏是最上乘」を「仏は是(せ)なり最上乘なり」と読み、「是仏道立此人」を「是仏(せぶつ)は道立此人なり」と読み、「是仏有仏性」を「是仏(せぶつ)は有仏性なり」と読んでいるとも考えられる。この百丈の語の引用文の中の他の「是」についても同様の解釈ができるであろう。

黄檗、在ニ南泉ノ茶堂ノ内ニ坐ス。南泉、問ウ黄檗一、定慧等學、明見佛性、

此ノ理如何。黄檗曰ク、十二時中不レ依ニ倚セ一物ニ始メテ得シ。南泉云、莫シ

便チ是レ長老ノ見處一ナルコト。黄檗曰ク、不レ敢。南泉云ク、醬水錢ハ且ハラクク、

艸鞋錢ハ教ニ什麼人ヲシテカ還一エサ。黄檗便チ休ス。

いはゆる定慧等學の宗旨は、定學の慧學をさへざれば、等學すると

ころに、明見佛性のあるにはあらず、明見佛性のところに、定慧等學

の學あるなり、此理如何、と道取するなり。たとへば、明見佛性はたれ

が所作なるぞ、と道取せんもおなじかるべし。佛性等學、明見佛性、此

理如何、と道取せんも道得なり。

黄檗いはく、十二時中不レ依ニ倚一一物トいふ宗旨は、十二時中たとひ

十二時中に所在せりとも、不レ依ニ倚一なり。不レ依ニ倚一一物これ十二時中なる

*がゆゑに、佛性明見なり。この十二時中、いづれの時節到來なりとか

せん、いづれの國土なりとかせん。いまいふ十二時は、人間の十二時な

檗一藥（懷）抄（乾）（正）（龍）（洞）（瑠）（長）（玉）

慧一惠（乾）（正）（龍）以下略 等一等（乾）（正）（龍）

學一覺（洞）以下略 日一云（懷） 不一敢（右）

致一右（瑠）（抄） 云一日（抄）

且一但（懷）（正）（洞）（瑠）（玉）、將（抄）

右一下（ク）アリ（龍）（瑠）（長）

鞋一鞵（長）（玉）、右（ア）アリ（抄）

黄檗便休一上欄外ニ加筆アルモ異筆ノ可能性アリ

（懷）ナシ（抄）（乾）（正）（龍）（長）（玉）（徳）左、

此一後黄檗便休ノ四字アルヘキ歟被略歟（アリ）抄）

慧一右（瑠） 學一覺（右）「字一」アリ（抄）

學一右（カク）アリ（瑠）、左（惠）アリ（抄）

と一ころ一所（抄）、以下略、処（瑠）、以下略

の一ナシ（乾）（正）（龍）

此理如何一此（瑠）、此理如何（長）

へ一え（正）、ゑ（瑠） たれ一誰（抄）
おなじ一同（抄）、ヲナシ（乾）（正）（龍）瑠（長）（玉）
此一右下、ノ一アリ（龍） 道取せんも一ナシ（乾）
得一右下、「テ一」アリ（長） は一わ（瑠）
不一依ニ倚一右（「フエイ」アリ（瑠）
依一倚（右）、「エイ一抄（アリ） 倚（左）、「ヨリ一」アリ（抄）
物一右（モツ）アリ（瑠） と一ナシ（乾）（正）（洞）
所一処（懷）（乾）（正）（龍）ひ一い（瑠）
が一ナシ（抄） ゆ一ゑ（ゆ）へ（懷）（乾）（正）（龍）洞（洞）
この一此（抄）、右（「コ」アリ（瑠）
節一右（「セツ」アリ（抄）
來一來（懷）（乾）（正）（龍）洞（洞） ん一む（抄）
國一國（乾）（正）（龍）

るべきか、^{*} 佗那裏に十二時のあるか、^{*} 白銀世界の十二時のしばらくき
たれるか。^{*} たとひ此土なりとも、たとひ佗界なりとも不依倚なり。すでに
十二時中なり、不依倚なるべし。

莫便是長老見處麼といふは、これを見處とはいふまじや、といふがご
とし。長老見處麼と道取すとも、自己なるべしと回頭すべからず。自己
的當なりとも黄檗にあらず。黄檗かならずしも自己のみにあらず。長
老見處は露迴迴なるがゆゑに。^{*}

※懷契書写本の書き改めナシ。

【書き下し】

黄檗、南泉の茶堂の内に在りて坐す。南泉、黄檗に問う、「定慧等學、明見佛性、此の理如何」。黄檗曰く、「十二
時中一物に依倚せずして始めて得し」。南泉云く、「便ち是れ長老の見處なること莫し麼」。黄檗曰く、「不敢」。南泉云く、
「醬水錢は且らく致く、艸鞋錢は何麼人をしてか還えさしめん」。黄檗便ち休す。

間一問(懷)(抄)(乾)(正)(龍)(洞)(長)(玉)
十二時なるべきか佗那裏にナシ(乾)
佗那裏一佗那裏(懷)(抄)(龍)(洞)(長)(玉)、他
那裏(正)以下略、右、「タナリ」アリ(璫)
白銀一右、「ビヤクイン」アリ(璫)
銀一右、「ゴン」アリ(抄)
たとひ一たとい(璫)、以下略
此土一右、「シト」アリ(璫)倚一右、「イ」アリ(抄)
莫便是長老見處麼、莫便是長老見處麼(龍)
いふ一云(抄)これ一是(抄)(璫)、右、「コレ」
アリ(璫)一とし一如シ(璫)
回頭一回头(懷)(乾)(正)(洞)(璫)、右、「クワイトウ」
(抄)、「ウイテウ」(長)(玉)(德)にナシ(玉)
的當一「的」ノ右、「テキ」アリ(抄)、右、「テキトウ」、
左、「マサシクアタリ」アリ(璫)
かならずしも一必シモ(抄)、からずしも(玉)
露一右、「ロ」アリ(抄)、左、「アラハル」アリ(抄)、
左、「アラハル」アリ(長)(德)
迴迴一回头(懷)(乾)(正)(龍)(洞)(璫)(長)(玉)
(德)、右、「ウイ」アリ(玉)(德)、「ケイ」
アリ(抄)(長)左、「アラハル」アリ(玉)
ゑ一(乾)(正)(龍)(洞)(玉)(德)

【語註】

黄檗在く黄檗使休：出典は『天聖広灯録』巻八「筠州黄檗鷲峰山断際禅师章」で、「師一日在茶堂内坐。南泉下来問、定慧等学、明見仏性。此理如何。師云、十二時中依倚一物。泉云、莫便是長老見處麼。師云、不敢。泉云、漿水錢且置。草鞋錢教什麼人還。師使休（師一日茶堂内に在り坐す。南泉下に來たりて問う、定慧等学、明見仏性、此の理は如何。師云く、十二時中、一物に依倚す。泉云く、便ち是れ長老の見る処莫きや。師云く、不敢。泉云く、漿水錢は且く置く。草鞋錢は何麼人をしてか還さん。師便ち休す）」『禅学叢書』五・四〇七頁とある。定慧等学：定（禅定）と慧（智慧）を等しく学ぶこと。定と慧は水と波のように一体で、前後のない関係であり、この事実を具現することをいう（『禅学』五二九頁）。黄檗：黄檗希運（生没年不詳）のこと。南岳下。閩県（福建省福州）の人。福州の黄檗山で出家、のち天台に遊び、更に百丈山（江西省）の懐海の弟子となり、その玄旨を得た。大安寺に住し、会下に多くの弟子を集めた。また、相国裴休の請に応じて鐘陵（江西省）に行き故山を懐しみ黄檗山と名づけ、開祖となった。これより黄檗の門風大いに振った。のち会昌二年（八四二）に竜興寺に移り、大中二年（八四八）宛陵（安徽省）の開元寺に住し、大中一〇年ごろ没した。弟子に中国臨濟宗の始祖臨濟義玄らがいる。裴休の集録した法語集に「傳心法要」があり、禅家の「心」について委曲をつくして述べている。大中年間（八四七〜八五九）示寂。断際禅师と諡さる『禅学』一九二頁）。なお、『中國佛教人名大辭典』（上海辭書出版社、一九九九年十一月、三一―一頁）では、生没年を「〜八五〇」とする。南泉：南泉普願（七四八〜八三四）のこと。南岳下。天宝七年生れ。鄭州（河南省）新鄭の人。俗姓は王氏。至徳二年（七五七）父母に願ひ、密県（河南省）大隈山の大慧について受業する。大曆二年（七七七）三〇歳の時、嵩岳（河南省）会善寺の髡律師によつて受具する。初め性相の学を修し、さらに三論等を学んだが、玄機は経論の外にある旨をさとり、ついに馬祖道一に参じてその法を嗣ぐ。貞元十一年（七九五）池陽（安徽省）南泉山に留錫し、禅院を構築し、山に入つて木を切り、田を耕しつゝ禅道を鼓吹し、自ら王老师と称して三〇年間山を下ることがなかった。太和（八二七〜八三五）の初め、池陽の前太守の陸亘は南泉に参じて師の礼をとる。趙州從諗・長沙景岑・子湖利蹤など多くの弟子を接化する。太和八年一〇月二日疾となり同年二月二日示寂・世寿八七。同九年、全身を塔に入れる『禅学』一〇六二頁）。茶堂：住持の行礼のところ。もとは法堂の後、寢堂（方丈）の前にあつたが、いまは方丈をあてゐる『禅学』三八五頁）。『禅学辞典』には、「茶室のこと」（正法眼蔵註解全書刊行会、一九五八年三月、四三〇頁）とある。

定慧等学明見仏性：禪定と智慧を等しく学べば、明らかに仏性を見る。この句は、北本『大般涅槃經』卷一〇の「善男子。十住菩薩智慧力多三昧力少。是故不得明見仏性。声聞縁覚三昧力多智慧力少。以是因縁不見仏性。諸仏世尊定慧等故明見仏性了了無礙。如觀掌中菴摩勒果（善男子よ。十住菩薩の智慧力多く三昧力少なし。是の故に明見仏性するを得ず。声聞・縁覚の三昧力多く智慧力少なし。是の因縁を以て仏性を見ず。諸仏世尊の定慧等しきが故に明見仏性、了了無礙なり。掌中に菴摩勒果を觀するが如し）」（『大正藏』一・二・五四七頁）からの引用と思われる。十二時中不依倚一物始得：一日中一物にも寄りかからないのが良いでしょう。「十二時」は、一昼夜。一日中「禪学」四九二頁。「始得」は、：してやつと合格（『禪語』一七四頁）。長老：住持・和尚を称する敬称（『禪学』八六九頁）。『御抄』には、「不依倚一物始得」と云は、無別義いひはつることばなり（『菟書大成』十一・二〇八〜二〇九頁）とある。不致：進んで：しない。思い切つて：しようとはしないこと。どういたしまして。不致当。謙遜の挨拶語（『禪学』一〇六一頁）。どういたしましてという挨拶の語。謙遜して言う場合と、そうでない場合とがある（『禪語』三九六頁）。『問解』には、「不致の言はは、宋土で、已に有る芸能を人に問はん時、手前にある芸能を其通りにいはんとて、先づ卑下して、不致左様でもござらぬと云ふ言ばなり」とある（『菟書大成』一七・二二頁）。『私記』には、「もとおのれにある能を問取せらるるに、なかなかあたはじと謙遜することばなり、しかるを転じていやはや、さやうにてござらぬと、謙遜しながら言外に能をあらはすことばとなる」とある（『菟書大成』一九・五七五頁）。漿水錢：「漿」は「こんず」、おもゆ。または「つくりみず」で、ゆざましにして飲用とするもの。「漿水錢」は行脚に於ける飲食費（『春秋社本』一・三六頁）。且致：「且置」に同じ。：はともかくとして、さておいて（『禪語』一八七〜一八八頁）。草鞋錢：わらじ代。漿水錢・草鞋錢いずれも修行そのものをいい、それぞれに於て仏性を尽くしていることをいう（『春秋社本』一・三六頁）。十二時中不依倚一物：一日中一物にも依らない。ここでは「始得」の語が省かれている。『御抄』に、「十二時中は何事の答哉、これ定慧等学明見仏性を答也。諸悪莫作程の詞なり。十二時中は、不依倚一物なり。莫作の心なり」（十二時中は何事の答なりや、これ定慧等学明見仏性を答るなり。諸悪莫作ほどのことばなり。十二時中は、不依倚一物なり。莫作の心なり。莫作のころなり。）（『菟書大成』十一・二〇八頁）とあり、「不依倚一物」は「莫作」の意味であると説かれる。ところで道元禪師が言う「莫作」とは「作すこと莫かれ」（行つてはならない）という意味ではなく、「作すこと莫（な）し」（行ふことがない）という意味であるが（『諸悪莫作』の巻参照）、この『御抄』の解説は、「不依倚一物」とは「一日中、（仏性以外の）何物にも

依つてはならない”というのではなく、“一日中、（仏性以外の）何物にも依ることがない”という道理を示したものであろう。前註「十二時中不依倚一物始得」項もあわせて参照されたい。所在（处在）：ありか。『御抄』には、「处在と云は不依倚の处在也と可心得也。去來の蹤跡にかゝはれぬゆへに、不依倚とゝかる。又不の字を不加、依倚とゝけども、よらずと心得也。如葛藤依樹とはいへども、只葛藤々々をまつふと心得ごとくなり」（处在と云は不依倚の处在なりと心得べきなり。去來の蹤跡にかゝはれぬゆへに、不依倚とゝかる。又不の字を加えず、依倚とゝけども、よらずと心得るなり。如葛藤依樹とはいへども、只葛藤々々をまつふと心得ごとくなり）『菟書大成』十一・二〇八頁）とあるが、この「葛藤々々をまつふ」とは、「葛藤」の巻にある「おほよそ諸聖ともに葛藤の根源を裁断する参学に趣向すといへども、葛藤をもて葛藤をきるを裁断といふと参学せず、葛藤をもて葛藤をまつふとしらず」（三三一頁）という記述のことで、これを元に「依倚」の解釈をしたものと考えられる。また、道元禪師による用例は、「這裏是什麼处在」などの形で公案の中で取り上げられ、たとえば『永平広録』卷六、第四一四上堂では黄龍慧南に関する上堂の中に同句が見える（『春秋社本』十一・一四〇頁）。『中国語大辞典』上では、「处在十字路口」を「岐路に立つ」（角川書店、一九九四年三月、四六〇頁）と訳す。白銀世界：清淨無垢で、まったく塵埃を絶した、本来自性清淨心をいう。正位一色、空界無物の実態を形容した語（『禅学』一〇一四頁）。『景德伝燈録』「汝州首山省念禪師章」には、「白銀世界金色身 情与非情共一真 明暗尽時俱不照 日輪午後見全身（白銀世界金色身、情と非情と共に一真、明暗尽くる時俱に照らさず、日輪午後全身を見る）」（『禅文化本』二五七頁下）とある。『溪嵐拾葉集』に「普賢居白銀世界、文珠居黄金世界」（『大正蔵』七六・七五五下）とあり、白銀世界は普賢菩薩が居る世界とも言われる。いふまじや…言わないだろうか。『開解』には、「いふまじやとは大和言葉に、まじきにやと云ふを、きにの二字を略す、真に書けば、間敷也、うたがひの辞也、言ば其れを、納僧たる長老の見處とは、云ふべからず」（『菟書大成』一七・二一〜二二頁）とある。回頭…①こうべをめぐらす。ふり返る。②反省する。③戻る。来たところへ帰る（『禅学』一四三頁）。ここでは①の意。的当…要点。大事な点。たしか。確当（『禅学』八八二頁）。「的中する」「当てはまる」の意もある。現代語訳では「全く同じ」と訳した。露迴迴…明らかにあらわれているさま（『禅学』一三二二頁）。

【直訳】

黄檗（希運）が南泉（普願）の茶堂内に坐っていた。南泉が黄檗に尋ねた、「定学と慧学を等学することで、明らかに仏性を見る（というが）、此の道理はどういうことか」。黄檗が言った、「十二時中一物にも依りかからないのが良いでしょう」。南泉が言った、「これは長老の見解ではなからうか」。黄檗が言った、「不敢」。南泉が言った、「飲食代はともかく、わらじ代は何も言わなかつた」。

ここに言う定慧等学の宗旨は、定学は慧学を妨げることではないから、等学することにより明見仏性があるのではなく、明見仏性するところに、定慧等学の学があるのであり、「此理如何」と道取するのである。たとえば、「明見仏性は誰の所作であるのか」と道取するのも同じであろう。「仏性等学、明見仏性、此理如何」と道取するのも、道得しているのである。

黄檗が言う、「十二時中不依倚一物」という言葉の宗旨は、十二時中がたとえ十二時中に所在していても、「不依倚」なのである。不依倚一物は十二時中であるから、仏性を明らかに見るのである。この十二時中は、いずれの時節到来とするのだろうか。どこの国土であるとすればだろうか、いま言うこの十二時は、人間（界）の十二時であろうか、他の世界に十二時があるのか、白銀世界の十二時がしばらく来ているのか。たとえこの国土であっても、たとえ他の世界であっても「不依倚」である。すでに十二時中であり、「不依倚」であるはずである。

「これは長老の見解ではなからうか」と（南泉が）言ったのは、「これを見解とは言わないだろう」と言うようなものである。「長老の見解か」と言ったとしても、自己（の見解）であるはずだと回頭してはならない。自己に的当であっても黄檗ではない。黄檗は必ずしも自己のみではない。長老の見解は隠れることなく現れているのであるから。

【現代語訳】

黄檗（希運）が南泉（普願）の茶堂内で坐っていた。南泉が黄檗に尋ねた、「禅定と智慧を等学することで明らかに仏性を見るというが、この道理はどういうことか」。黄檗が言った、「一日中一物にも依りかからないのが良いでしょう」。南泉が言った、「これは長老の見解ではなからうか」。黄檗が言った、「どういたしまして」。南泉が言った、「飲食代はともかく、わらじ代は誰に返させるのか」。黄檗は何も言わなかつた。

ここに言う「定慧等学（云々）」の宗門での解釈は、〈定学（禪定）と慧学（智慧）は一如であつて〉定学は慧学を妨げることはないから、定学と慧学を等学する（等しく学ぶ）ことで明らかに仏性を見ることがあるのではなく、明らかに仏性を見るところに、定学と慧学を等学するという「学び」があるのであり、〈そのことを南泉が〉「此理如何（この道理はこうなのだ）」と示しているのである。たとえば、「明見仏性とは誰」（仏性）の所作であるのだ」と言つたのと同じであるはずである。へしたがつて「仏性等学、明見仏性、此理如何」と言つても、言い得ているのである。黄檗が言つた、「十二時中不依倚一物」という言葉の宗門での解釈は、一日中たとえ時間の中にあつて時間から離れることはできないとしても、〈その時間に〉「よらない」のである。「何物にもよらない」というこの一日中であるから、「明らかに仏性を見る」（仏性そのものになつている）のである。この一日中に、〈仏性以外の〉どんな時間がやつてくるとするのだろうか、〈仏性以外の〉どこの国土であるとするのだろうか。ここで言う一日中は、人間界の一日中であろうか、その他の世界の一日中があるのか。白銀世界の一日中がしばしやつてきているのか。たとえこの国であろうと、他の世界であろうと〈仏性そのものであり、その国や世界の時間に〉「よらない」のである。すでに一日中〈が仏性であり、仏性以外の何物にも〉、「よらない」はずである。

「これは長老の見解ではなからうか」と〈南泉が〉言つたのは、「これを〈黄檗の個人的な〉見解とは言わないだろう」と言つたのと同じである。「長老の見解か」と言つたとしても、〈黄檗は〉自己〈の見解〉であるはずだと、ふり返つて（自己の見解と認めて）はならない。自己〈の見解〉と全く同じであつても黄檗〈の個人的な見解〉ではない。黄檗〈の見解〉は必ずしも自己〈の見解にとどまるの〉ではない。長老の見解は隠れることなく現れているのであるから。

※二段目（南泉と黄檗の段）の【解説】は、次稿においてこの段の終了後にまとめて記載する。